

東京学芸大 石毛フミ子
都立立川短大 ○岡田 陽子

1. 前回は同方向および異った方向の組み合わせによる縫いつれおよび縫いずれを検討したが、今回は表布と裏布を組み合わせた場合の縫いつれ、縫いずれについて検討した。

2. 実験材料 表布は毛織物4種、裏布はキュプラ(ペンベルグ羽二重)。

実験項目 (1)①表布を上にし裏布を下にした場合、②裏布を上にし表布を下にした場合、布目の方向はたて、よこ、45°。

(2)縫いつれおよび縫いずれを少なくするための方法、①しつけかけ、②あて紙、③送り歯の高低、縫製条件：50番羽二重糸、針目6針/cm、針11番、回転数 950 ± 20 回/min、糸張力はそれぞれに適した張力を設定。

3. (1)①方向別に関係なく表布はほとんど縫いつれがなく、裏布はたて、よこ方向に縫いつれが大きくあらわれた。したがってたて、よこ方向の縫いずれが大。②斜め方向の伸びが大でたて、よこ方向の縫いつれは比較的小。表布は方向別による差は小さく縫いつれも小。したがって斜め方向の縫いずれが大でたて、よこ方向は小。

(2)3方法の中で縫いつれならびに縫いずれが小さいのは①の場合であった。あて紙によって縫いつれおよび縫いずれをかなり防ぐことが出来る。送り歯の高さも影響することがわかった。